圓光大師傳

四十二之二

法然上人行狀畫圖第四十一

毗沙門堂の法印明禪ハ參議成賴卿の息顯宗ハ檀那の嫡流智海法印の面受。密宗ハ法曼院の正統仙雲法印よりく顯密の棟梁。山門の英傑なりぞ。されども道心うちにをさまし。隱遁の本意ひたすらまさる。初發心の因緣ハかゝる事ぞなる。寂勝講の聽衆より集りしとき。細素貴賤ぞよをそれとおそれ思へり。

九曜文庫

夢幻泡影の時は、ちからをもすれば、ざるものひとりをあらん。俗家よりは、大将の庭上は、ゝゝゝ。大理は門外のふるまひ。僧中よりは、證義者は上童を具して別座をまうけ。攝録の息は随身をまうして直廬より系せる。これこゝの栄耀をゝくゝ見聞のこゝろゝゝゝまいれば、あらさはは、はゝゝとたゝへは、無常たちまちはいたらなん。餘算いまてらの

朝すへき。世とは、怠忙をゝたにいきては、胸は中は観念すこゝまるまゝて。隠遁のたをひ。この時治定ゝりこゝて申さるる上人は念佛興行。たはきにそはこゝまてはるゝり在世の勸化をきうは、籠居は、ゝゝゝ。思はゝ絶て後を出離の道いまは一変せは。ゝく思惟ゝゝは、たゝはるにゝたゝはゝ數珠。也もはすへくかゝれて自然は手すゝ

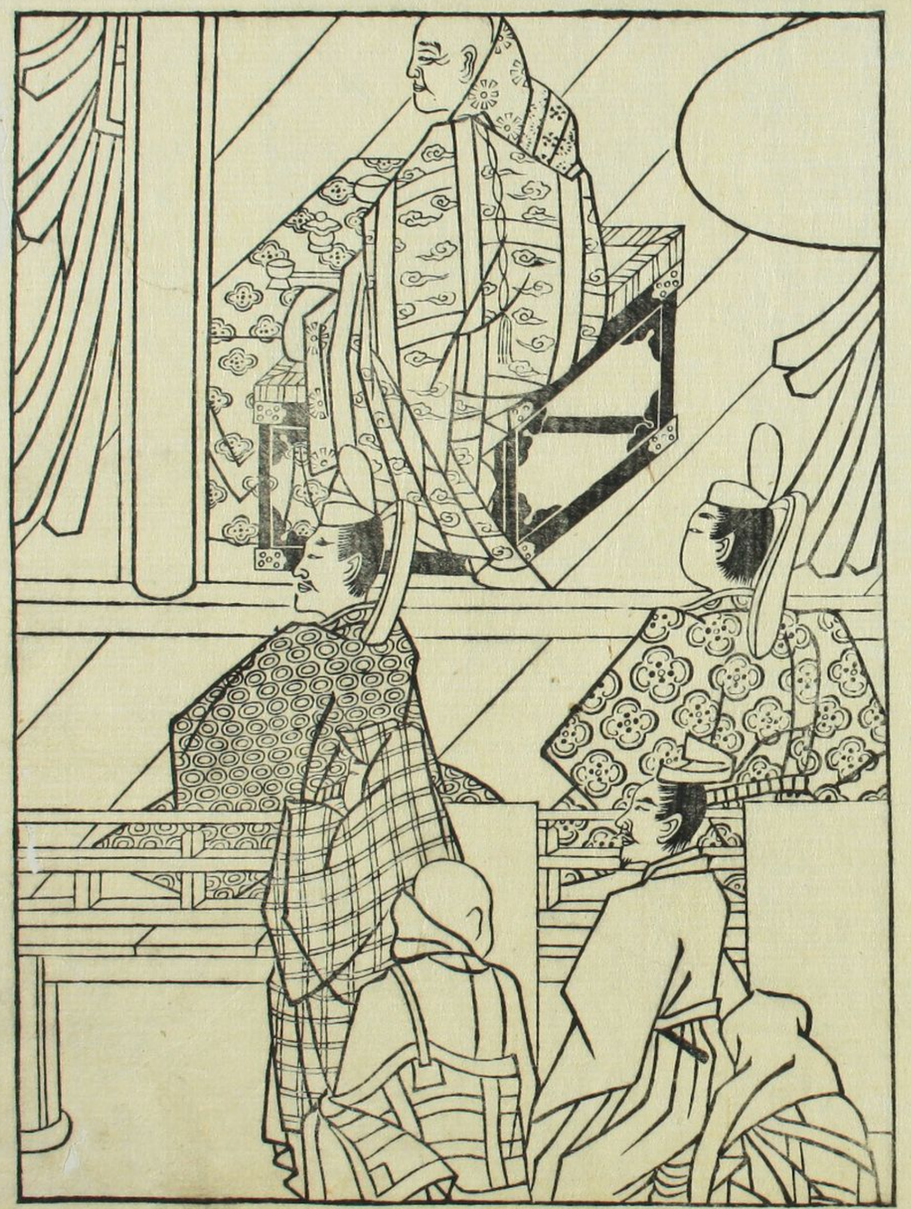
こうにてをるとき。有縁の法勝行の道。
稱名にあるべきよしをとき。其座よりくたもひ
てめしてはゐるの龍居ひとまとりをとり。
其後上人の弟子法蓮房より謁して。念佛の
法門を談じ上人所造の撰擇集を送られ
ける後披見のうち淨土乃宗義を得稱名乃功
能をさとる。信仰あまり改悔の心をたて。
選擇集一本を寫とめて。雙紙の袖に源宣

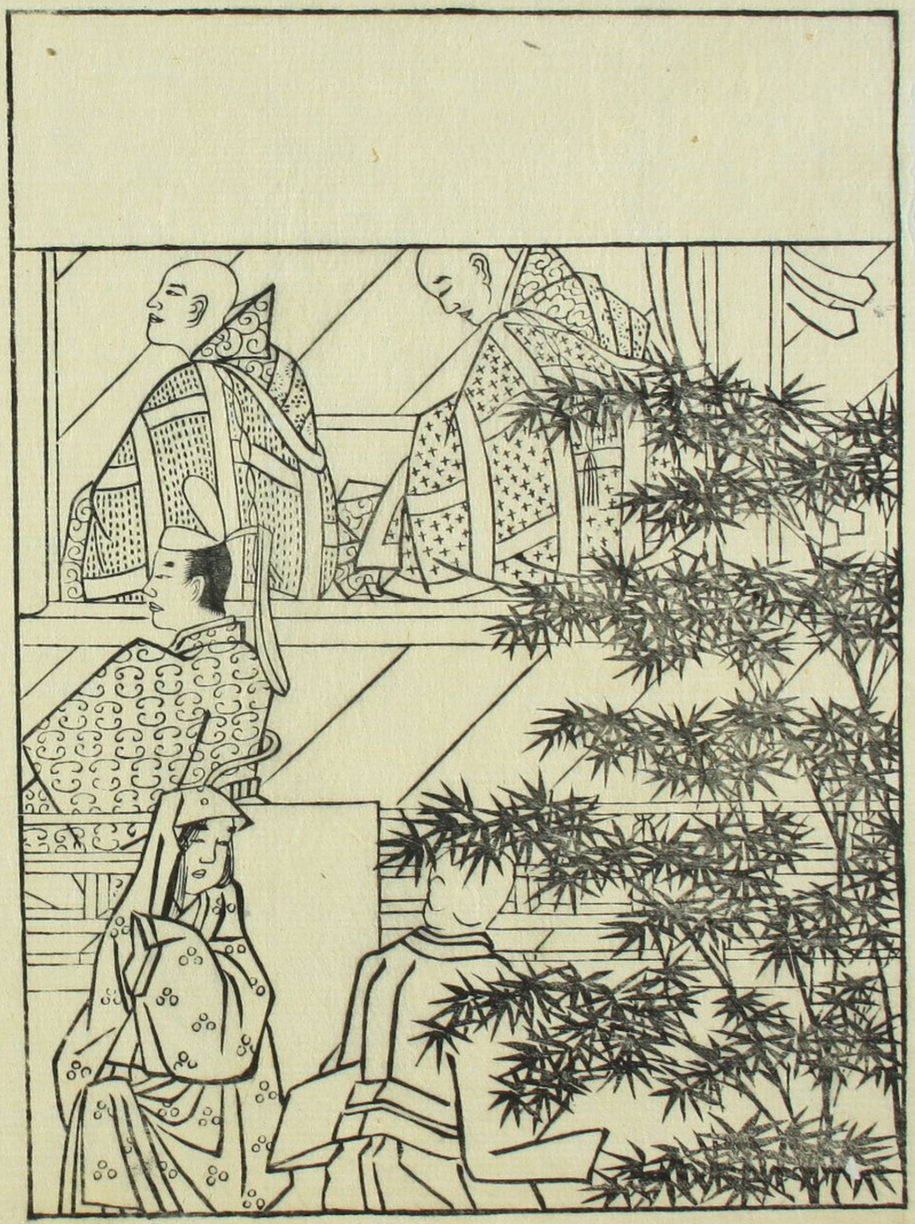
上人の選擇集ハ末代念佛行者の目足なりと
書付られあるべしと又述懐乃鈔をもちて。
上人の義をほめ申られたる彼鈔云近来法然
上人淨土宗を興し。專念の行をすゝめ
こと大よそ大よそ聖教を學するよ
をよろこばしてひなくすぎめ。ものに
不慮のほまれの上人の門弟に向顔する事
あわさ。彼人乃いとくきろばるよハ。信を謗も

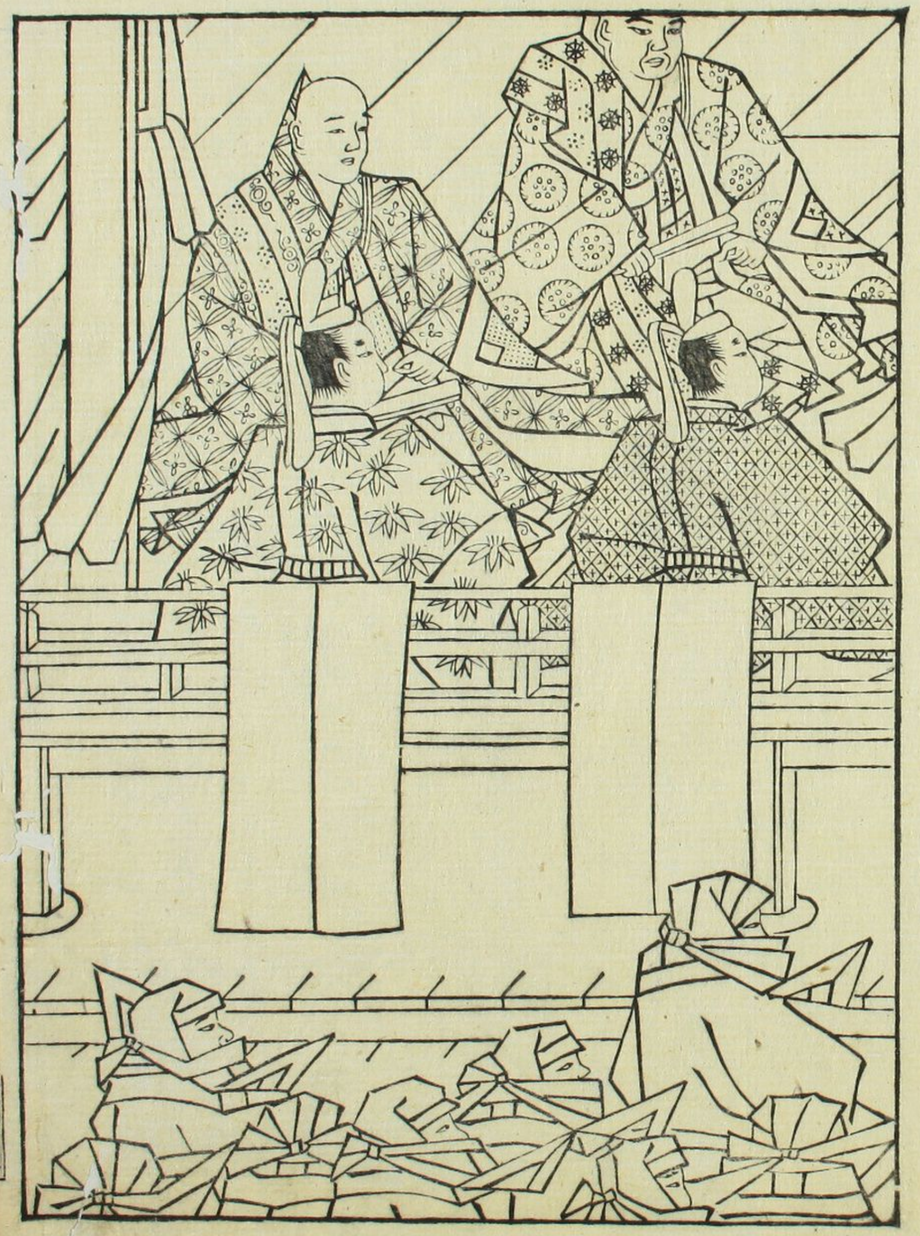
ともにあやまりあり。先師所造の書あり。こ
れをみて。をのゝ信し。もしは謗ども。とて。
選擇集は。法然聖人。これをつくるに。一遍は。よ
とてをひきくかるべし。二遍には。
偏執のこゝろやまひ。とおもひて。をこたらぬ。
第三遍よりは。深旨あり。をもはるゝ。四五遍
これをみるに。信をまして。疑なし。乃至我朝
浄土教すゝめ。念佛教ひろむる人。おほし。といへ

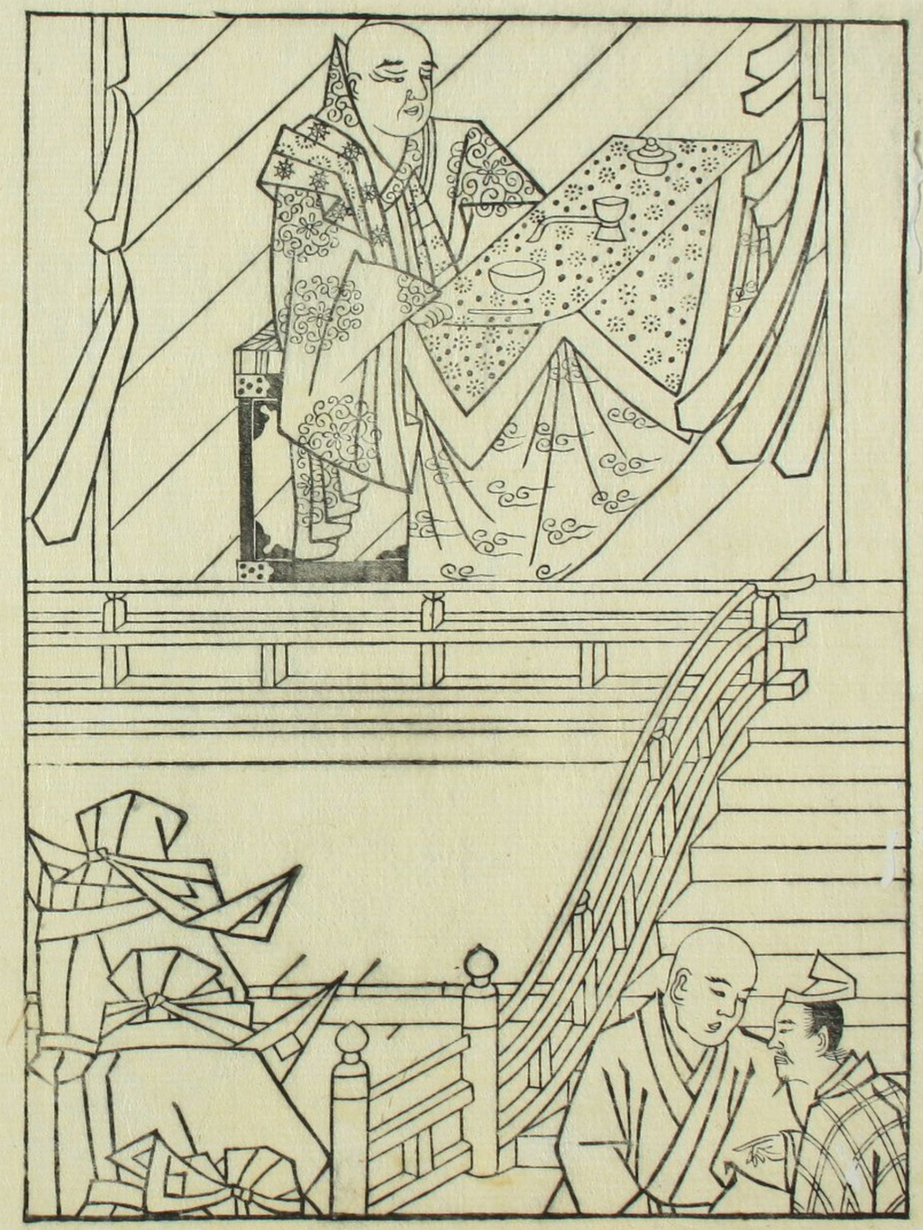
どもこれ上人。信謗をこたらぬ人。をこゝ
たりそのゆへをたづねるに。一向専念のすゝめ
よりをこれる。これ人の心。ものぐるへし。そ
の人。義をこゝろえ。
信ぜざるゝ。いまだ。
なぐらにそ。法をすゝめ。あ
らぬ。をこゝ。法をいまゝ。これ義をたつる人。
をいへ。失をこゝ。をもくは。人をすゝめたる失。

あつ。徳たるものをハ。人ごとにすぐれたる徳なるべし
ゆゑに。普通の義なる准ぶんへかゝるべし
こゝをもつて。往生するものをハ。
四遠よりあつまりきたれり。徳とゝもにたゝえ至
已上
畧抄









うけ法印ハ天台の宗匠なりしかゝる撰擇
集を披覧ける後ハひらへり在世ける誹謗を
くひぞく上人の勸化を信じてこゝろ後金池の
なゝこにゆせいまいやうで畢命を期とせんだうり
ゆわらて專修專念ける行をこゝろたゝく念佛
往生けいとれと他事なゝしゝうゝそけき
こえ都鄙よあまねく往生後こひ祈ぶ輩
たづねいるゝ源といぬ事なりきゝ義久

三年ばかり但馬宮より念佛往生の事御尋
ありしかば。要文をあつめくゝめて注申
したまき。又散心念佛の事。後鳥羽院遠所の御所
より。西林院の僧正兼圓よりたゞして仰下したる
ぞ。嘉禄二年正月十五日の御書云。六週の春秋
迎こいへらるゝ一身の慈をなぐさめ侍。
前世の悪業ちからおよぶところあり侍。
あをむかぬ日月徒らに出離の行徒

変せぬ止觀弘通等徒拔見し仏法を三諦圓
融の義を思ひ侍し無始の悪業のそきぐく
仏教自性空の理を心ゆるのけ侍ハ散心念佛
なりかゝるいとゞ仏三部経の中に雙觀経
たゞ。佛智不思議智を信せるものゝ往生
えがたしもゆ明り仏實相の理を心ゆ
思ひ侍へき樣如何。たゞへ。一こと塵勞門を飜
はれく。即是八萬四千の諸三昧門なり無明

轉じて明となる。氷とけて水となれるごとく
なり。虚妄を別とるゆゑ。煩悩を力をい得事
を疑ふ。自性むまれつきたるゆゑ。たゞ
煩悩をあらべきことばかりに一念を發して。
衆生と有縁の佛をきは。阿弥陀仏をわきて
念佛せんはゆゑ。六方諸佛の證誠をむね
とする。三諦相即の義を具足してゆく
なんと覚ぜず。都率の僧都覚超乃。真如觀と申
事にて。真如を思様として。ゆを別と煩悩とハ
見えぬ。あまりにひろき浅智なり。
ゆゑ。たゞ存じ。ゆ。隆聖房たゞ申ゆしハ。
すべも我等ゆゑよれをひらべき事と申
ばゆ。其間ゆ子細不審きはまれをゆ。
實をを今事ゆゑ際ハ。尾籠ゆ事にて出離も
かゝてハ不可叶ゆゑんよハ。たゞ散心念佛の行
よてゆへをゆいまゆ様をきゝぬへゆゆ。

一定出離しぬべく侍りん樣。相構て可注給侍
且如明禪ゟ被仰合候。委細ゟ可被仰侍。
今生ゟ事。いまゝこゝゟ外不可有他事侍。來世
ちへよむ〻〻成侍ぬと。心憂覺侍也。近日ゟ
上人たゞ〻。中〻以外ゟ新義ゟ多侍て。
難信受事にて侍。聖覺たゞ〻も為〻〻
ゟ〻ゟ侍て。兩方綏委細ゟ尋ゟ〻ゟ
侍て。家上の至要を可注給侍。御邊ゟ。散心

念佛ゟ義むゟと中ゟ侍ハゟ侍ハゟや覺
侍間。ゟめて兩方をも為令聞給。聖覺をめさる
べ〻と申侍なり。ゟ事を。一方〻〻りハ
あゝき事にて侍ゟ。ゟ〻〻思惟して
可示給侍。今生ゟ大望ゟ事ゟて侍なり。已上取詮
ゟ事につゝまて。西林院の僧正。明禪法印ゟたゝ
ハす狀云。遠所乃御書ゟ事を進覽。ゟ乃事
愚闇の身ゟたゞ〻ゟ御返事ゟ申ゟ〻〻侍。

ゆえし。単信稱名を遮するよあるべしといへ
らも。理觀念佛ハ。無上菩提如在右手とこそハ
仰へ。觀解よ堪しゑんぼうさん。因尚こそハ
仰ハめ。所詮御所存の樣を注給て。進ぜへ
く候。且ハ御書に見候數卑賤の類たちといふも。
なを曩劫の宿善を知るべし。いそんや九五の尊
たちぢなめく三界の故郷を出ぬく御仰歟。
一文一句の知識嚴汲引の媒かよ仰歟。よるして

大切の事に仰のれら御存知のををむきを
代覆藏なく注給て。進らへ候なり。已上 取詮明禪
法印の返狀云。散心念佛。理觀を相兼ら申候事。
口稱三昧。觀解をこゞ〻きゝ。いよく出離の媒
たらへく仰。但止觀等ハ。聖道門出離の一筋を
示仰。淨土門の散心念佛を遮るとあるべ仰。
易行道のれら理觀を具すべきよ仰歟仰。
慧心の釋その意よ仰數。且ハ傳記の文一紙

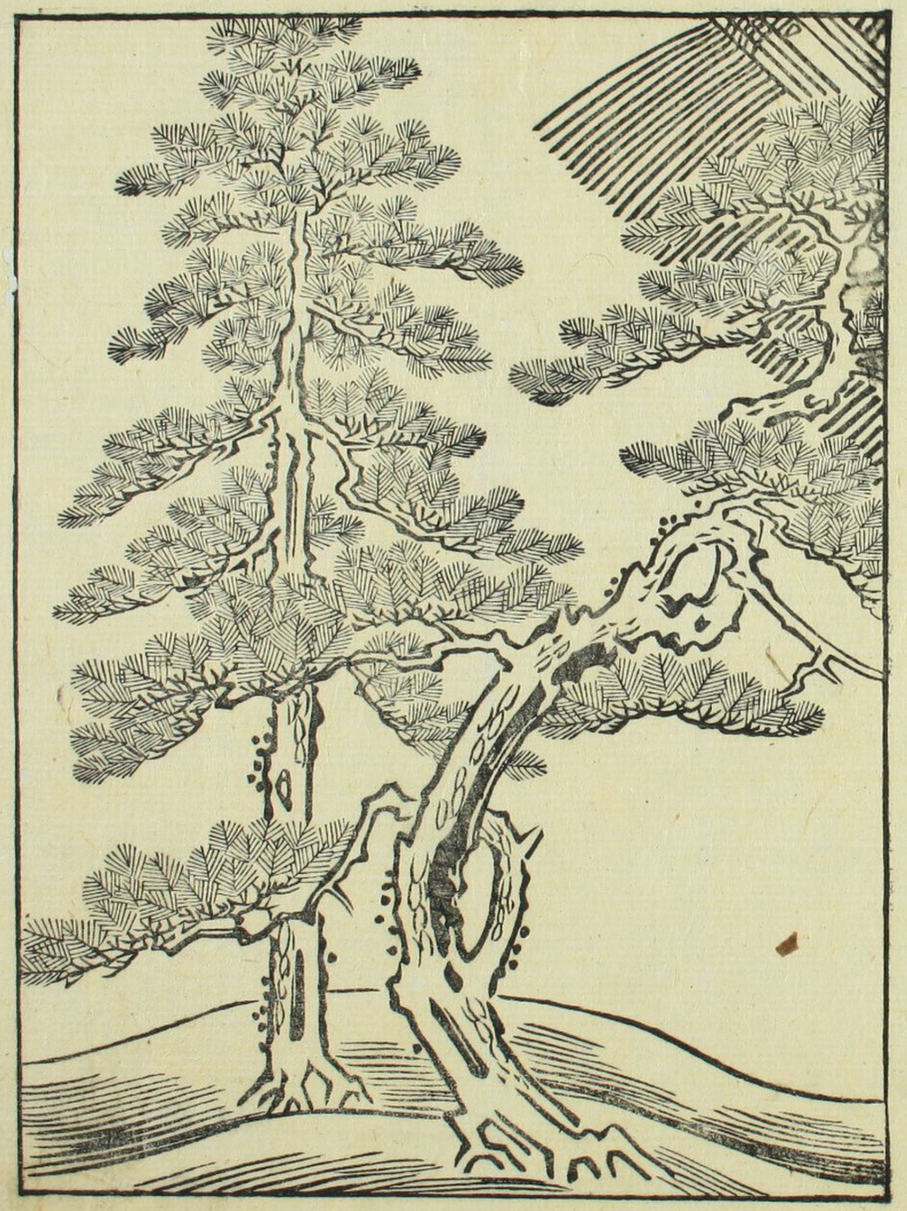
きいでて進上ぜ。これ條浄土宗ぜ道綽
善導等の人師乃心。尤右なき事にて侍うへ。
経教論家。たゝびゝ天台妙樂等ぜ釋まて也
違とへうら侍。地體菩提心よりたきて。縁理の
四弘ハ勿論ぜ事。菩提心をうゝ侍具不具ハ。
人師の釋等不定よ侍 慧心二釋いうんやそぜ上の
行。ゝ侍理觀を具とへきにあゝ侍。
但念佛ぜ外。餘行無益乃よゝ。近来ぜ聖人等

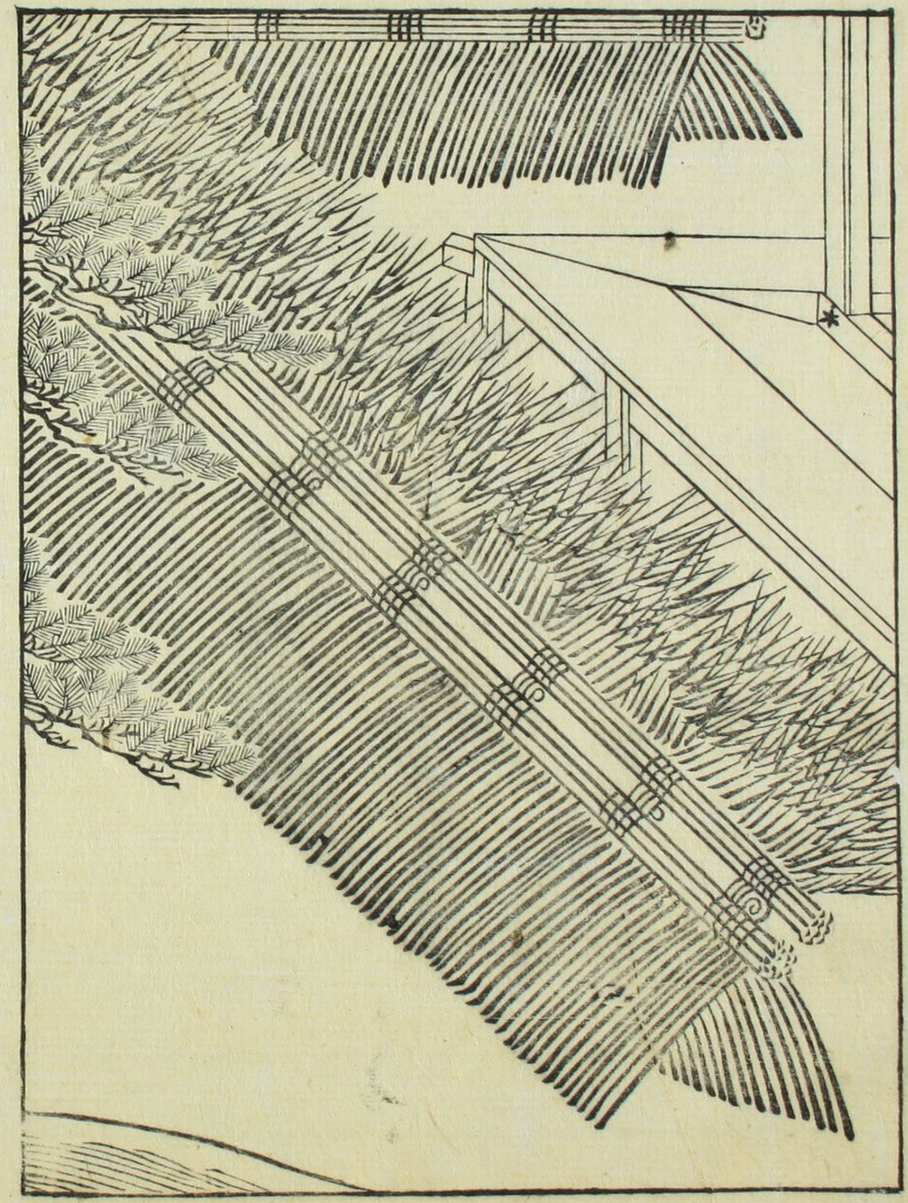
たゝ中侍。これ條ゝれる事心なく侍。泥
洹の真ぜ法寶。衆生種ゝ乃門よりゝ入ゆゝ。云云行
者ぜ根性區ゝ也。已心の高廣を觀して。
無窮の聖應をたく機縁ゝなるへきゝ
あゝ侍。たゝひ末代ゝりといゆゝもなんぞ
射的ぜ益なく侍ゝんや。但且ハ本願よ順ゝ。
且ハ易行たゝ。散心念佛往生ぜ業よ是まる
よゝ。出仕のむゝよゝ籠居乃いまにいゝ侍

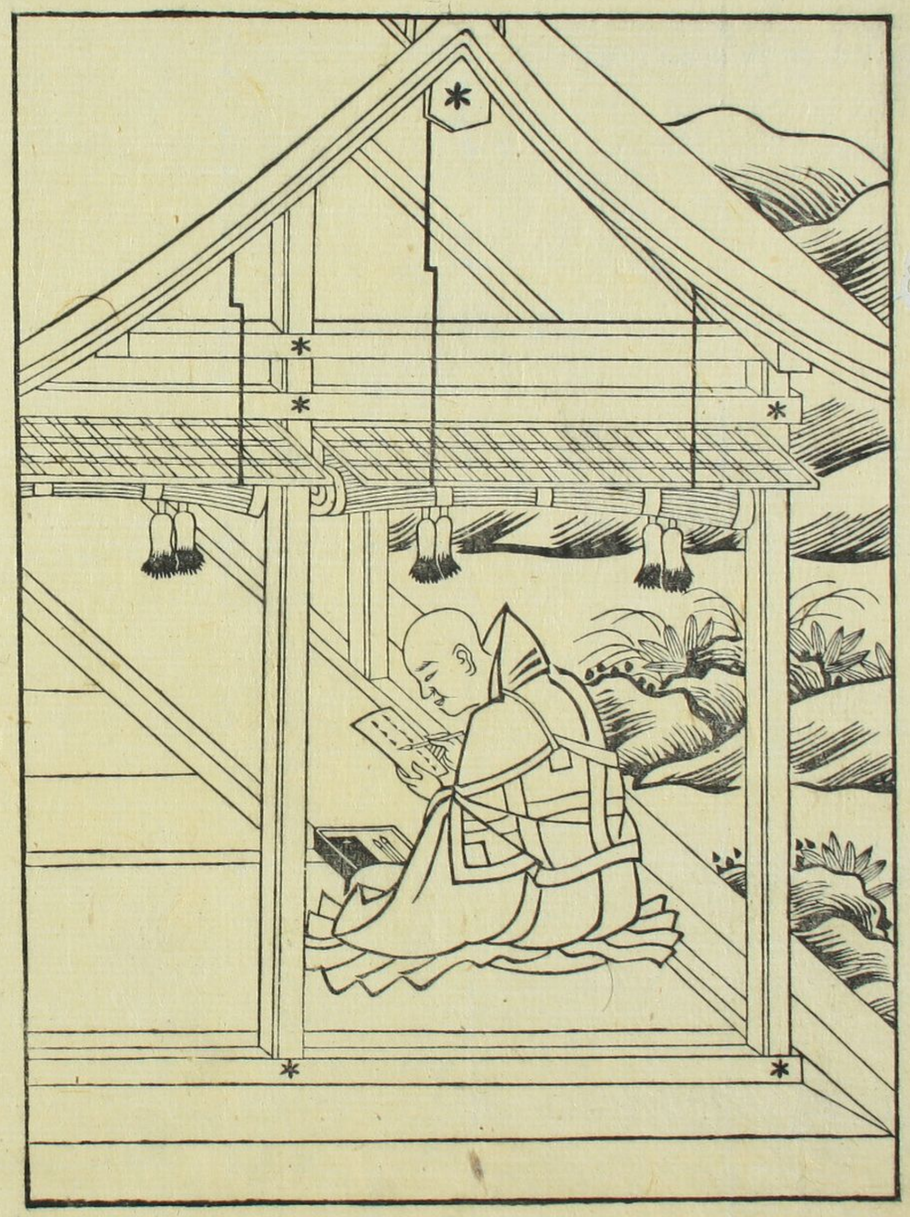
よてそれ意變ぜしぬ侍。御使を立なり。所存の
趣を申入侍。御取捨あて申さるへきよし。淺申
さるへ侍。已上取詮 法印注進。慧心傳記乃
文云。往年よ人ありてひそかに問て云。和上智行
世よ等倫なり。所修の行法なにをもてこの
宗とするや。答念佛を宗とす。又問諸行の中
よ。理をもて勝たりとす。念佛の時法身を
觀とやいかや。答ただ佛号をとなふ。又問何ぞ

理を觀ぜざる。答往生の業よ。稱名足ぬ。
本意これ念よあり。故よ理を觀ぜず。但これを觀
ぜんとれをうんよかうことをえず。ただ理を觀
ずるとも心あきらかよ通達して障碍ある事
なしと云。僧正又重たる状云。一紙の趣ぬ
肝よ銘ず侍。一代の聖教をのせ給ぬといぬ
とこそこれよりぐへ侍。愚意の所存。妹
毫も違せ侍。問信仰無極侍。抑彼へ進上の

書札。細少を為先。仮。文字を今をそうらい
けちえやうして御書寫ありて給へ。仮。御自筆。
上覧ためにて冥こうるへき間申仮也。云云取詮無
觀の散心念佛。弥陀乃本願よりなり。往生の業
因たるべし。慧心の傳記。法印の存知あきらか
なり





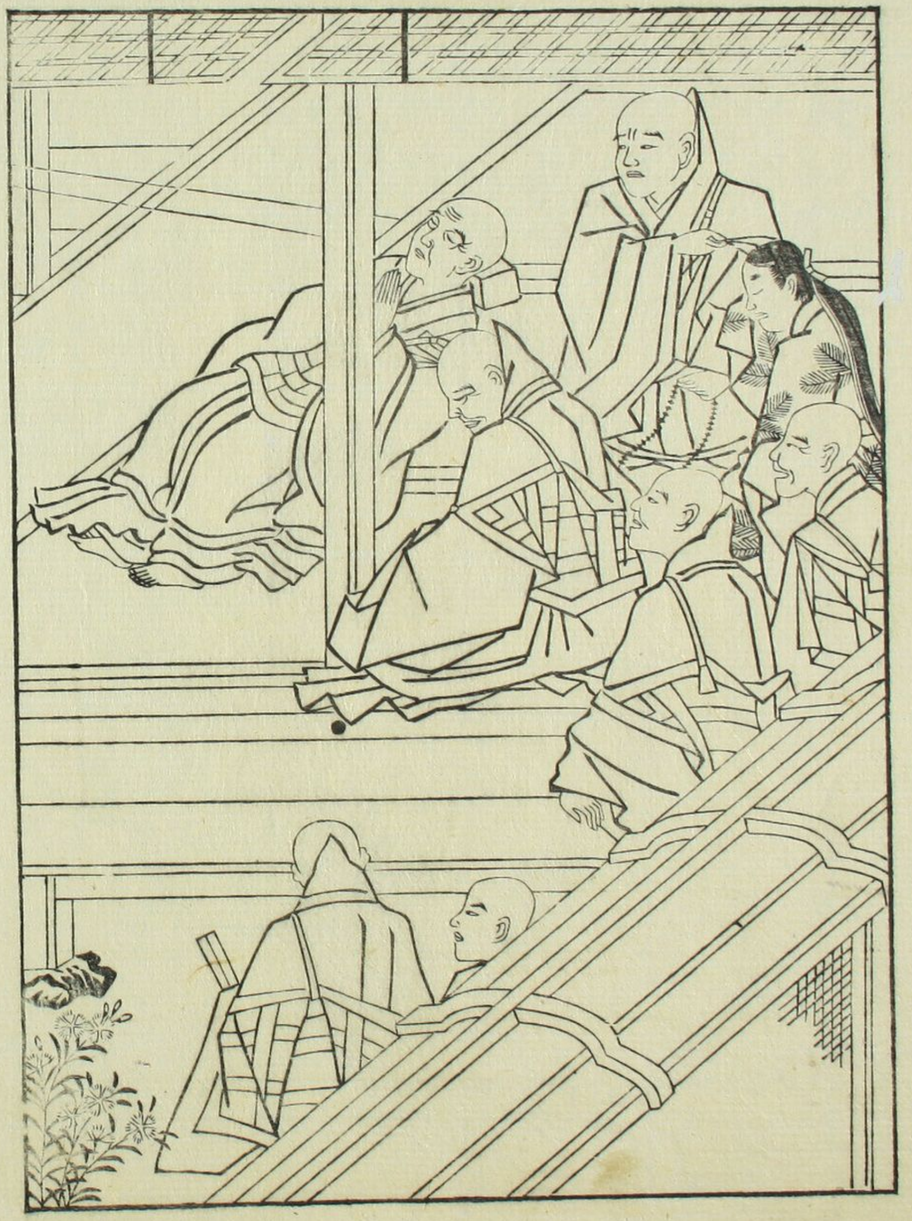


法印風病よりたちまち病悩日月ながくなるといへ
ども稱名は行ぜられをこたる事なく病席に
ぬして後ある時よりて淨土に事はあり
たる後弟子おどろきこれを尋申ければ。
明禪聖覺と。手をひて入るなる無
益の對揚こうれとぞうたりひしうたく
いまぬとおもひいでゝ迎たまふ故郷の
妄執をはらひ迎ざる淨利の依求乃ひま

あるにてそと申されたる。念仏不捨の信力を。
これにてこそあらまほしけれ。順彼佛願の正業も。
たゞ一言よりまもれきたり。紫雲たれびきて
往生人の相あわとて。へおほく群集をるよし。
看病の人を申たれん。何條明禪ゝ臨終ゝ。
紫雲ゝ沙法まで。よをよゞんそ。たゞ正念ゝ
を涙して稱名をとて息たえたらんゝ
をくへゝ涙とて。正信房を知識ゝて。頭北

面西ゝて極重悪人無他方便唯稱弥陀得生
極樂ゝ文をとれへ。念佛相續ゝ。如入禪定ゝ
ゝて。仁治三年五月二日午尅ゝ。往生ゝ遂ゝ
ゝをゝるとなん。凡如来ゝ出世ゝ。大權ゝ菩薩
外道とゝ。佛化をあゞむきてかへらく威
光をまゝき。上人濁世ゝ良導たゝ。
誹謗留難。きゝくきをひたゝうを。
時機相應の運ゝ。ゝんてその宗ゝ

隠没せし。相傳いよくちんたりぴうを
てていま現れりふようへらて信心をまさに
たれるものなり



法然上人行狀畫圖第四十二

上人の没後順德院より御宇建保。後堀川院の御宇貞應嘉祿四條院乃御宇天福延應。たびく一向專修停止より勅をくだしたる事ありしかども嚴制をもつて弘通すく。興行らでぬりごろくして。遺弟より化導都鄙あまねく念佛ひろ洋として耳にそてり。これあて止住百歳乃佛語むなしくして

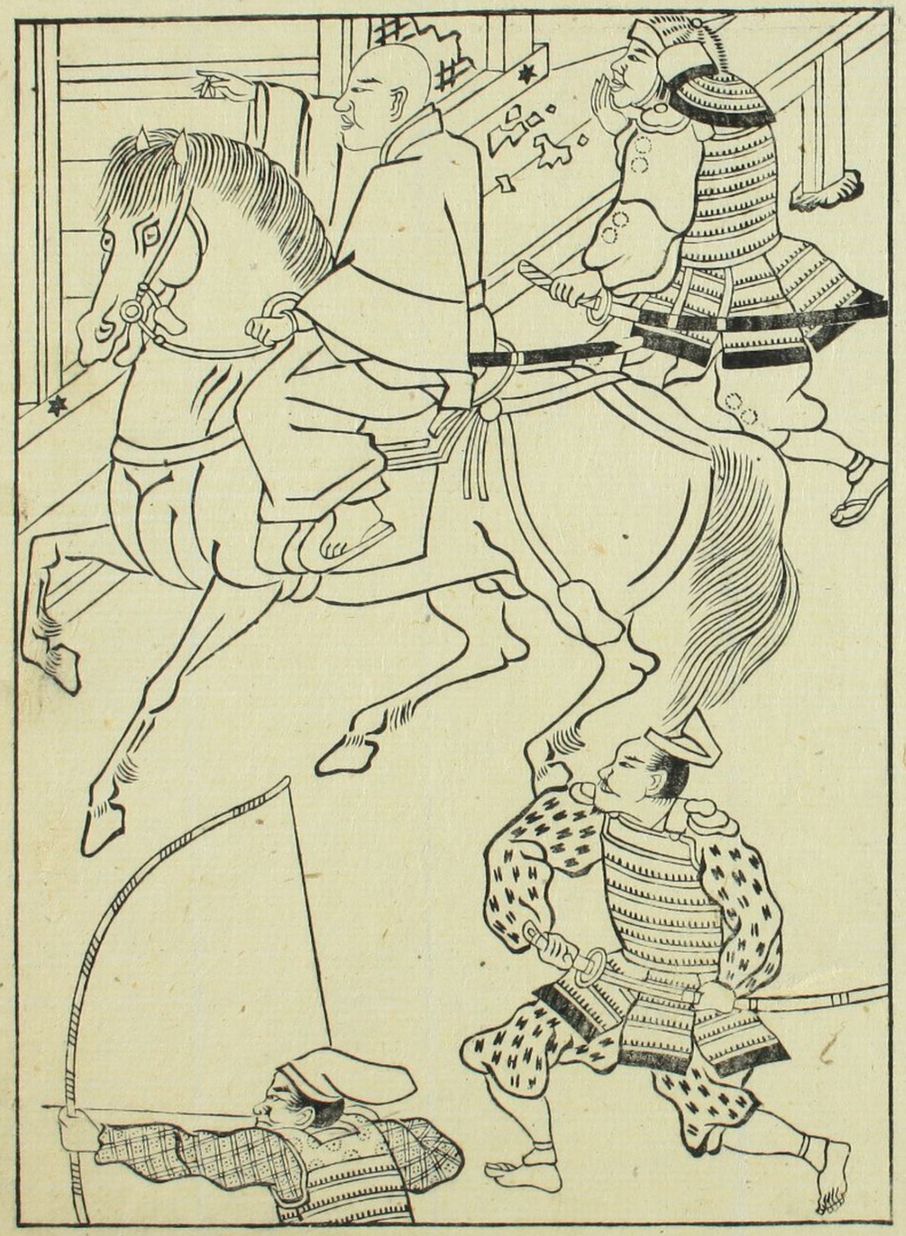
やうに利物偏増の益をあゝハ法よりすゝや。
爰に上野國よりの登山し侍る。並樓の竪者
定照。つゝ上人念佛の弘通をそゝ申く。
擇選擇といぬ破文をたてゝ。隆寛律師乃
庵りをくゝ法師。律師又顯選擇といぬ書を
ゝてゝ申ゝ。それ詞ハ汝ゝ僻破の
あゝゝぶる事。たゝへゝ晴天の飛礫ゝゝ
とぞあざむゝれて侍る。定照いよゝいき

とほりてゝ。ゝ山門よりぬ。衆徒ゝ蜂起を
す。免賀首 浄土寺僧正圓基 にゝゝへ。奏聞を。て。
隆寛幸西等ゝ流刑せゝ。あゝゝへ上人の
大谷ゝ墳墓を破却して。死骸を鴨河よ
りすへきよりゝ結構を

たゞよ勅許あわしうん。嘉禄三年六月廿二日。
山門より所司専當をたゝかひて。廟
堂を破却せんとぞ。こたに六波羅より修理亮平
時氏禁制のために使者をさしたつ。頻
宮内藤五郎兵衛尉盛政法師西佛子息一
人を相具してまうむかふ。たゞし勅許あわと
いぬとて。武家よりあひはらるへし。左右なく
狼籍をいふ事ならぬ自由せずべく

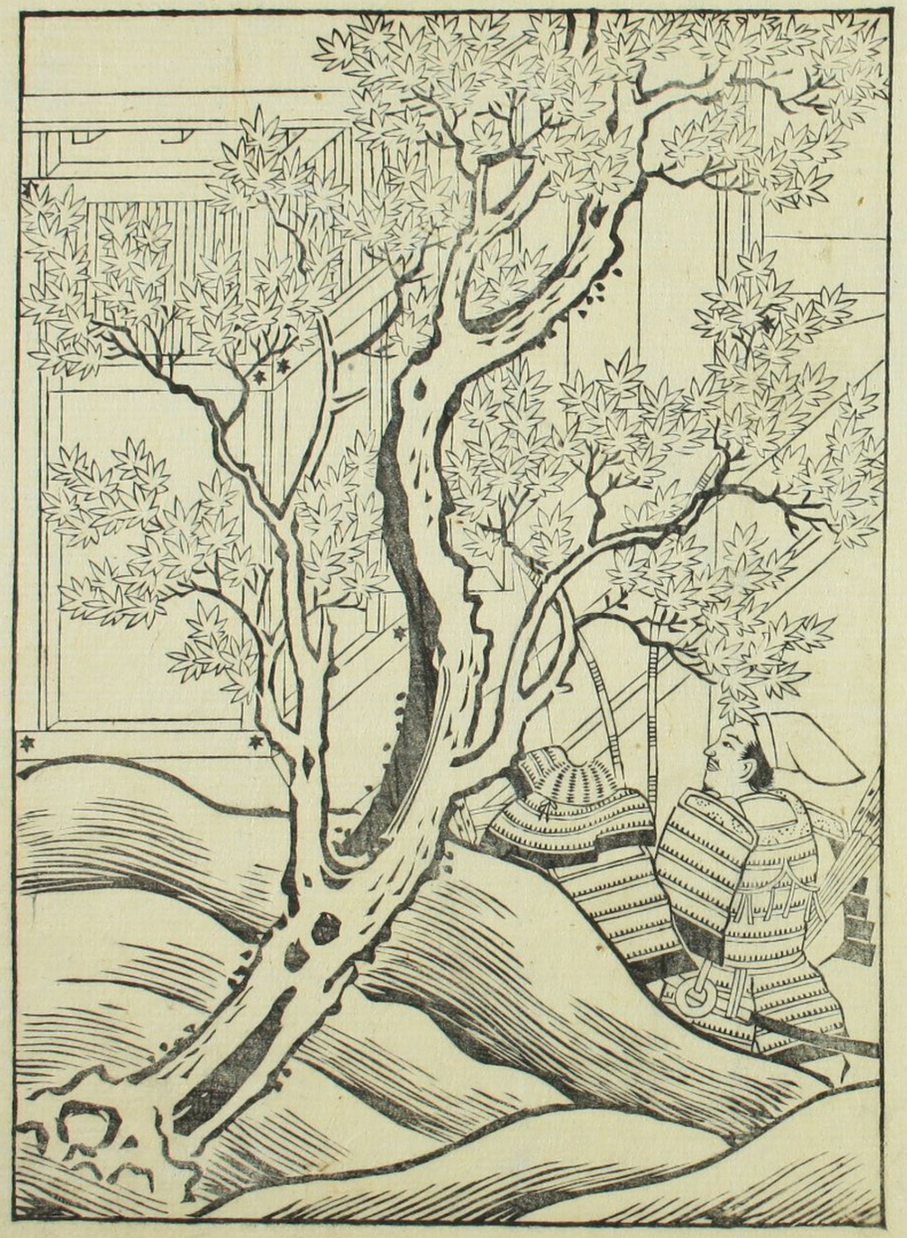
号法は悪行をゆるさず。穏便の沙汰をいたし
面々を制法よりかくいはれぬ。法よりゆるすべき
より。禁遏はとゝめをたくもといへゝをぶを
兼引せば廟墳を屋ふり房舎をこぼちゝ
き。醫王山王をきこゝえせ。念佛守護の
赤山大明神よりのはたてまつりて。魔縁
うちゝゝひはん。いけるをして四明三千は使と
号し。ぶりに四魔三障はむらがりきたるゝ。

をゝぶをは主君はためにそれのゝきをはれ。
命は師範はためにそれのゝきをはれ。あよ
ちゝきや。戦場ををて往生は門出ゝ。
悪徒ををて逆縁は知識とすべしゝ。善悪
不二はをいは。邪正一如はをきくは。山門は
使なゝだぢ。えんてきをゝん。自他を誘
ともに九品蓮臺は同行となり。怨親はめゝく。
七重樹下は新賓たゝんといひて。武威をぬ



まんぢ殺し使者退散してそれ日ふる死り

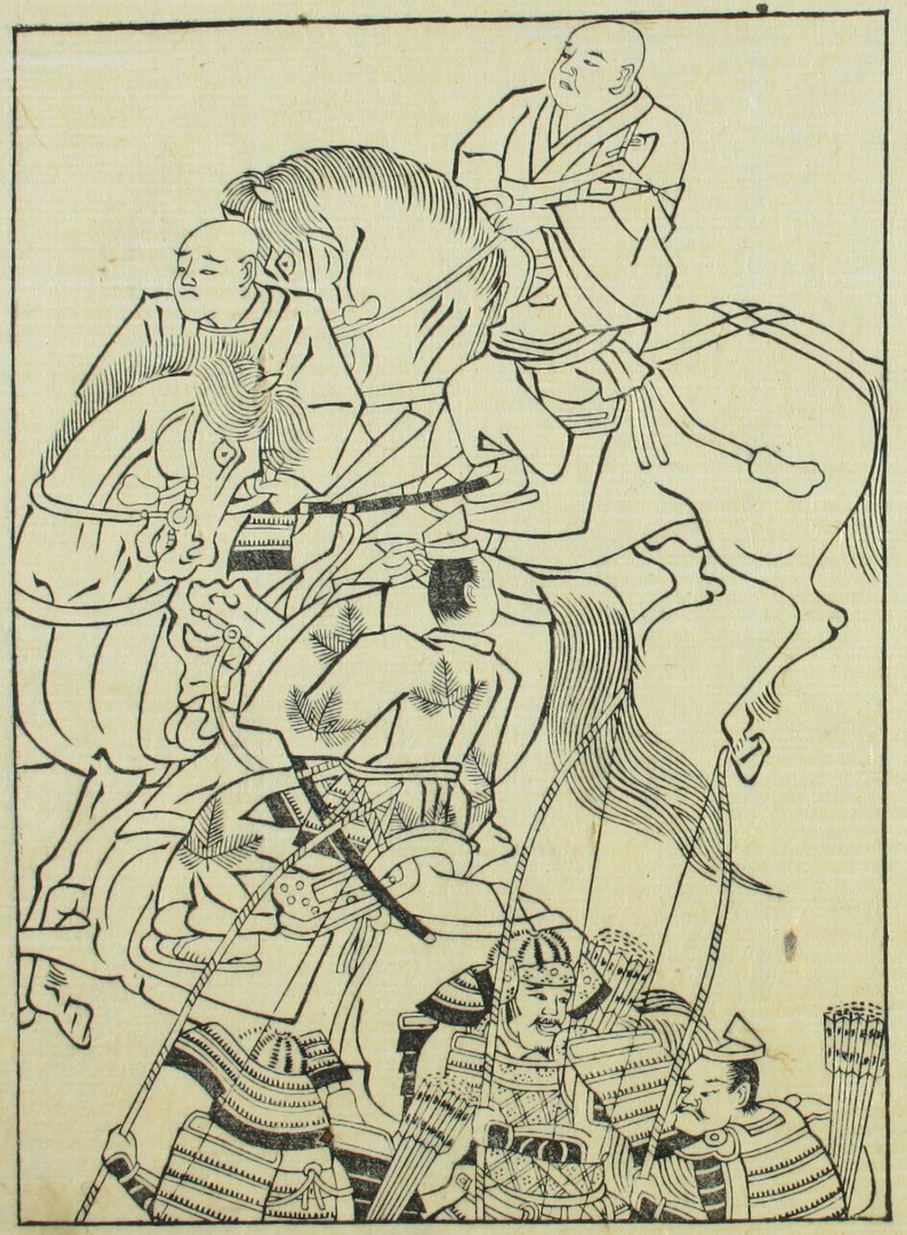
それ夜法蓮房覚阿弥陀佛等妙香院の僧正良快
月輪殿御息乃禅室より参りてこの事をつぶさにまいり
きれをといぬるに山門のいきどほりなをしのび
がたくやく改葬とてべたよりを申入るに
さいぜんの義をもよく承りこれを伝らるべしと
仰ぜられさいぜんのらひそうり
御棺の石乃櫃の蓋をひらくよ面像いまるで
ごとくして異香芬馥たり貴しなもいへば
ちりぬるものくず随喜の涙をぞながしける

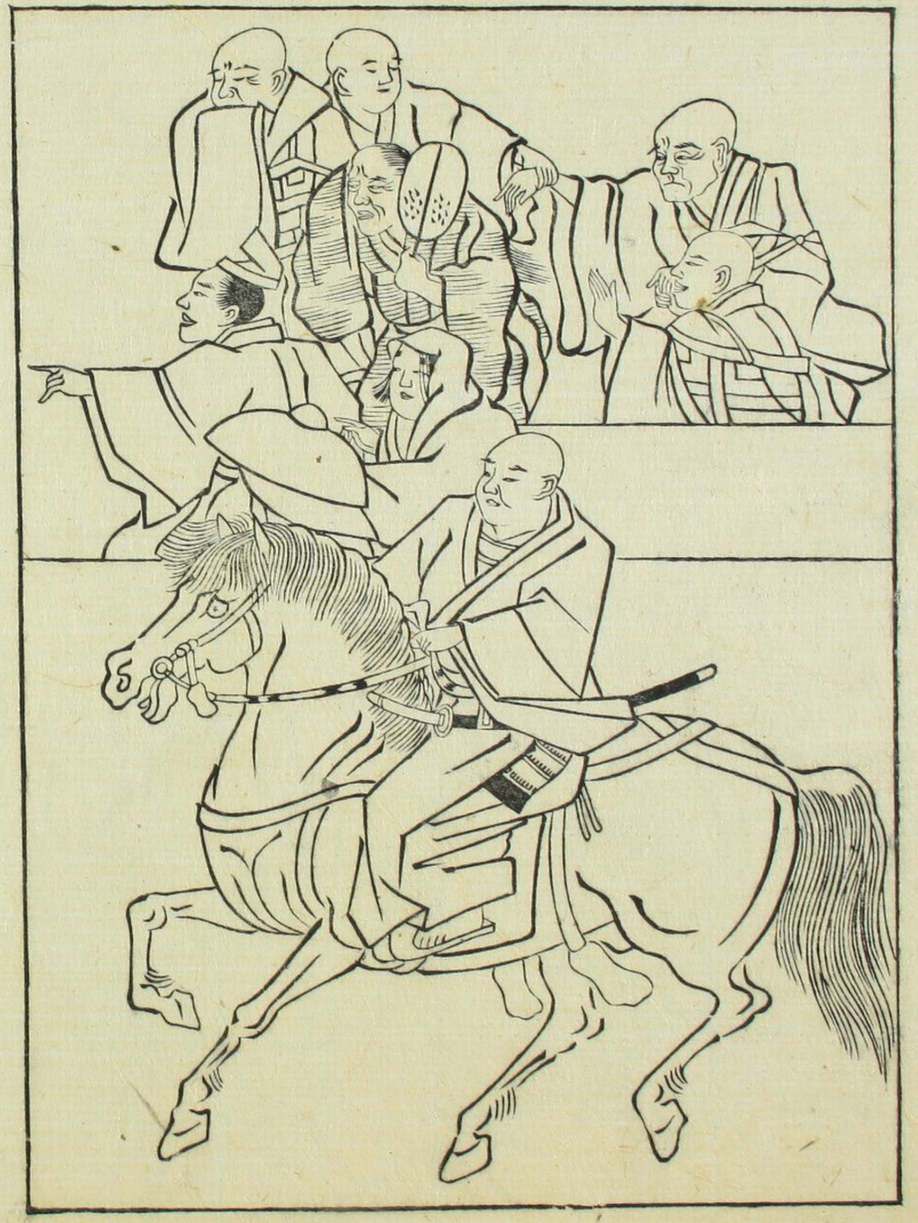


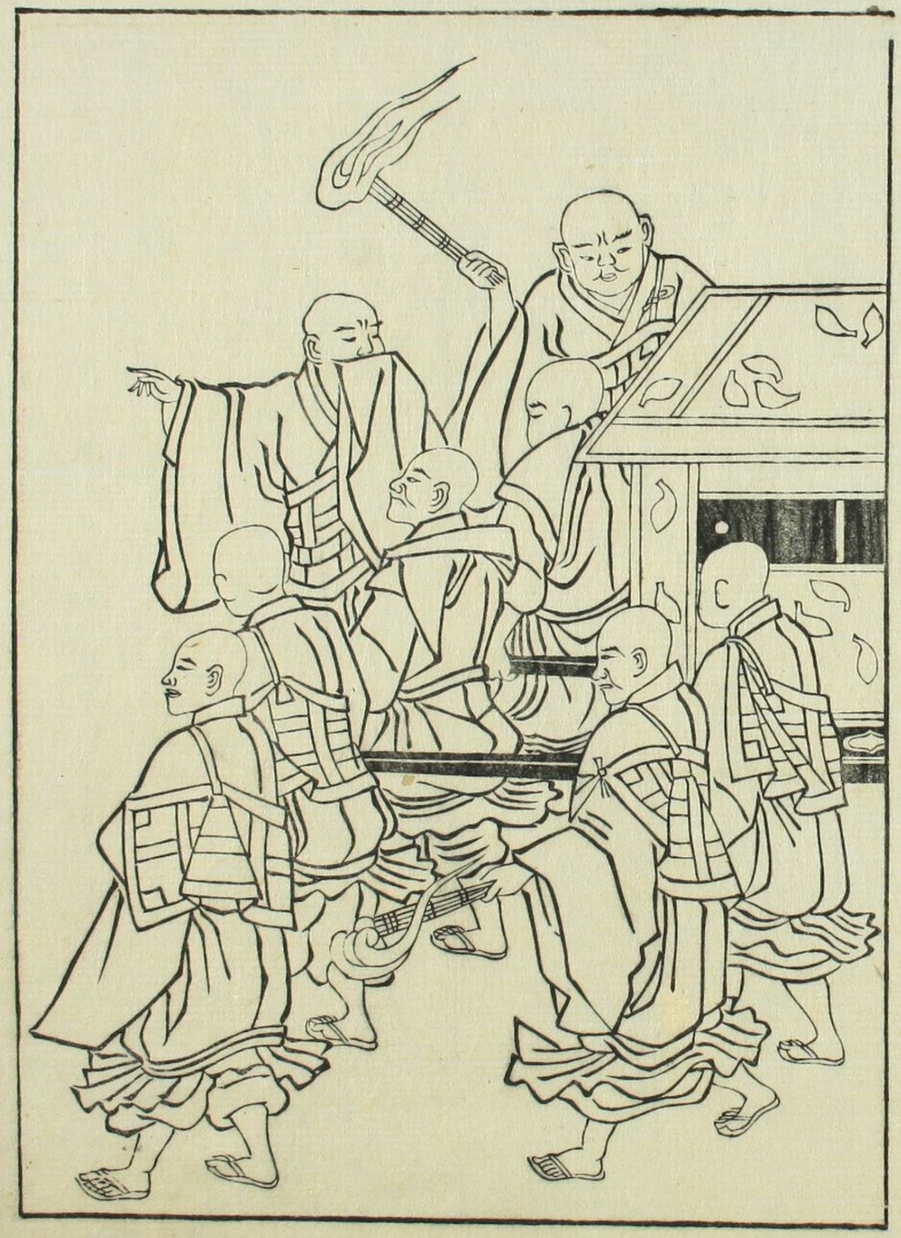
西郊にわたりまつるに。路次の障難城を
をれて。宇津宮弁弥三郎入道蓮生。塩屋弁入道
信生。千葉の六郎大夫入道法阿。渋谷の七郎
入道道遍。頻宮弁兵衛入道西佛等。出家乃身
なりといへども法衣弁うへよ兵杖を帯して。
御とともに参じをれり。家子郎等たちあひ
まつらへる程にて。軍兵濟々として前後よ
かこめり。遺弟以下御とともに参じる人一千

餘人なきの涙をなげかせをぞぬらす

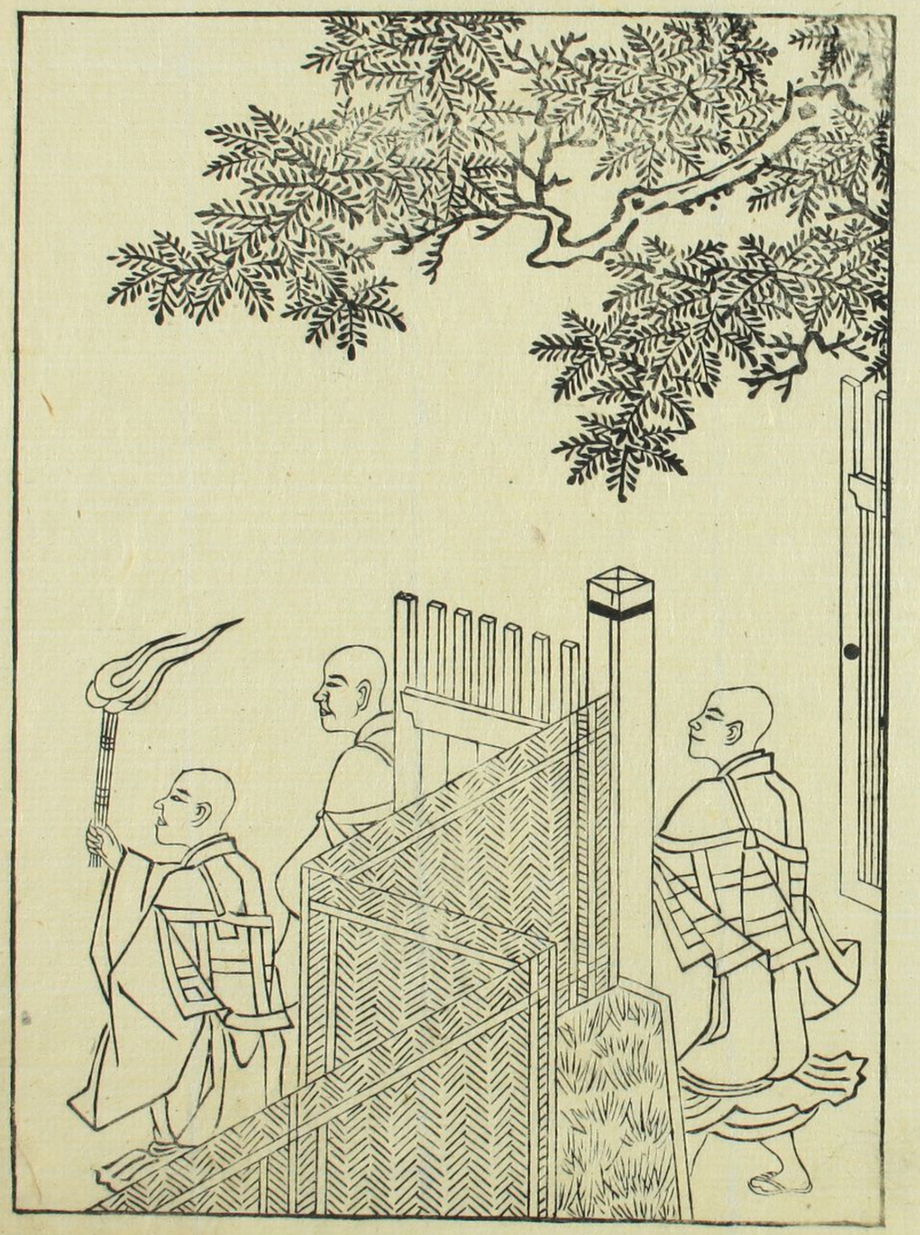
今昔

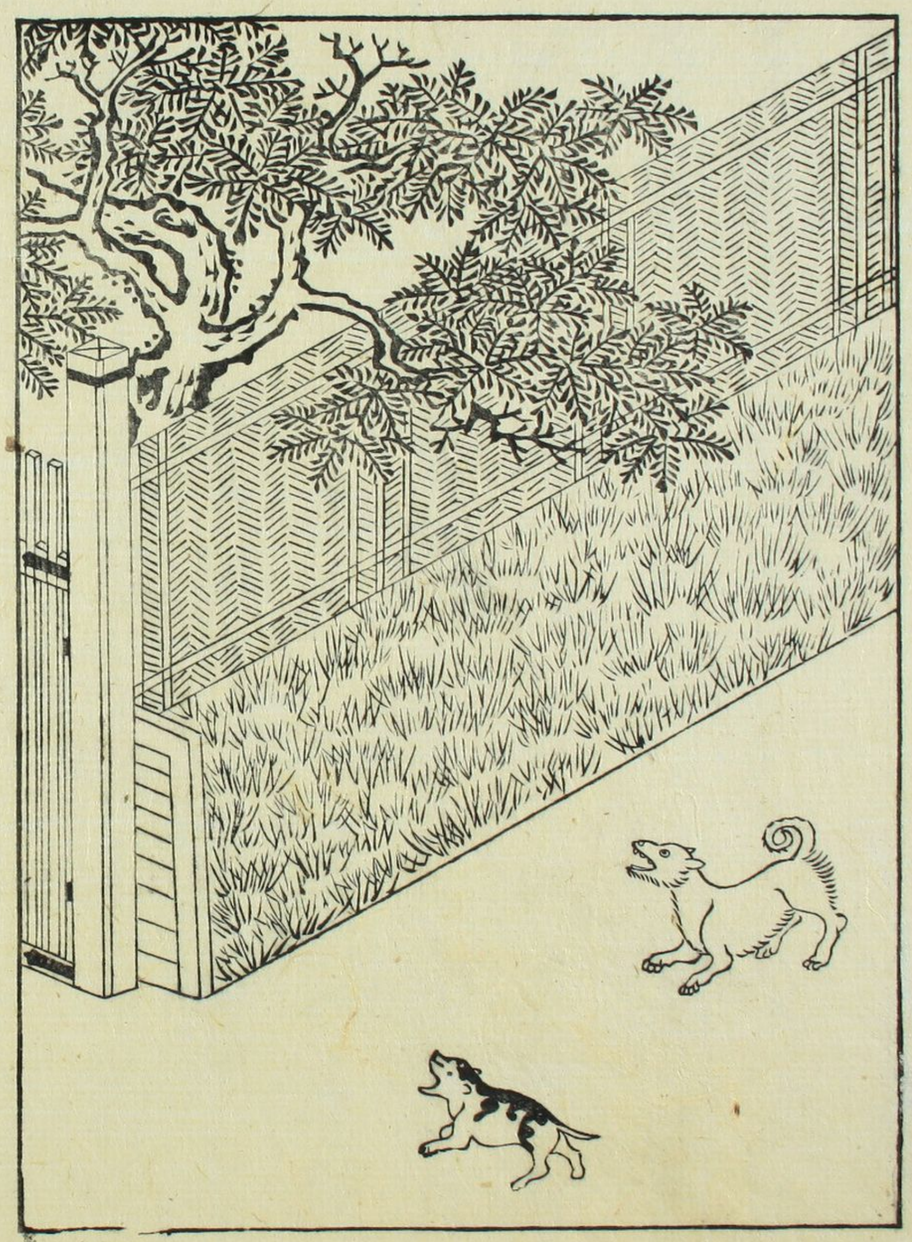






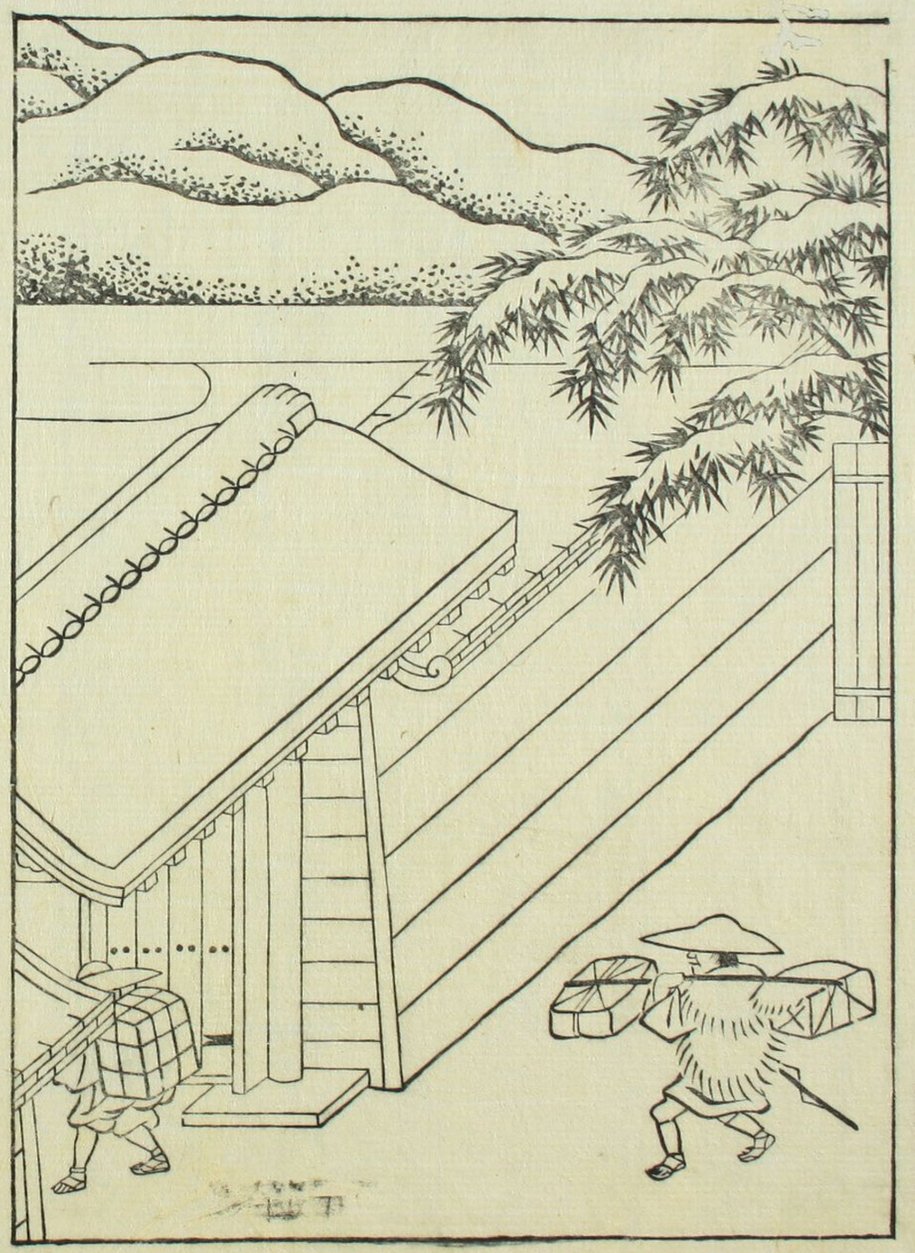
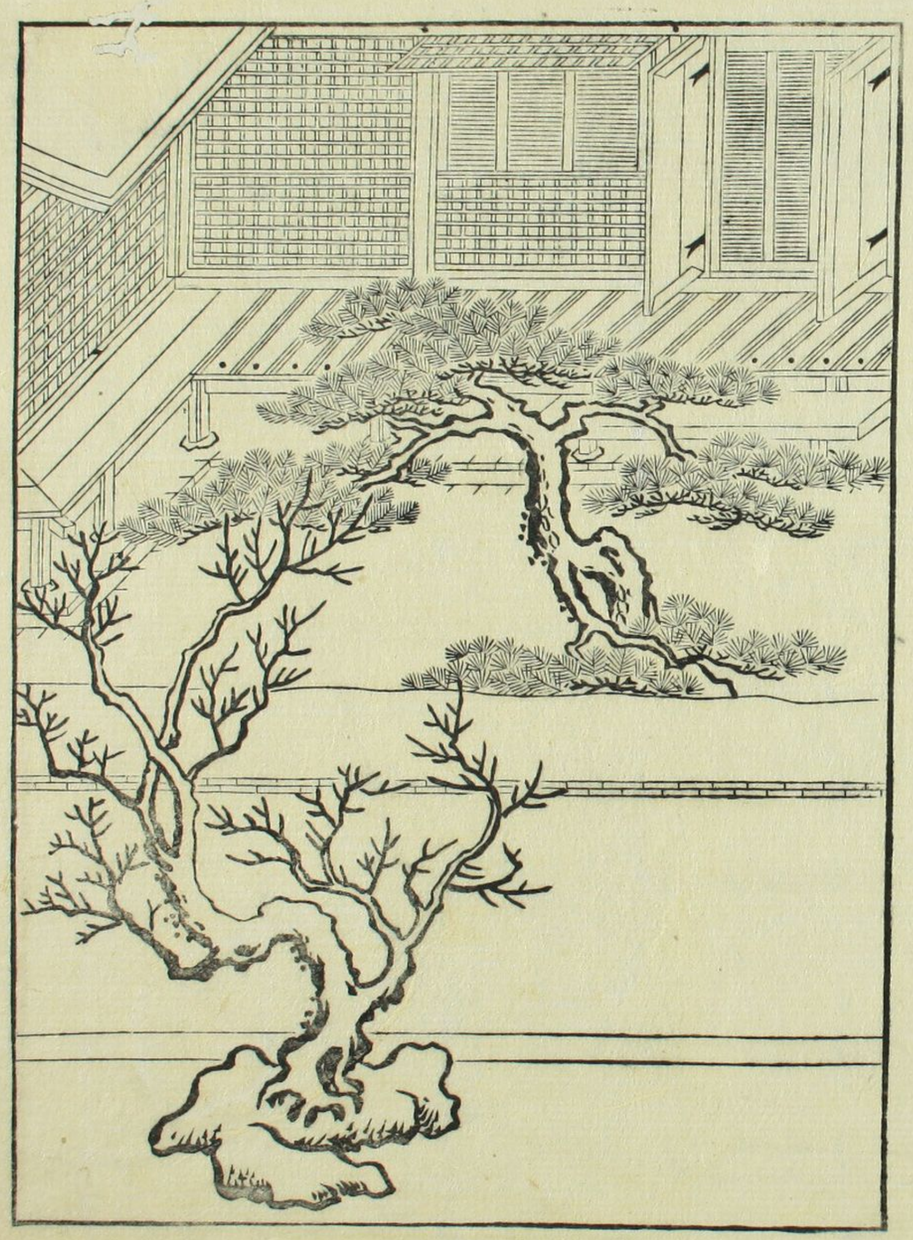
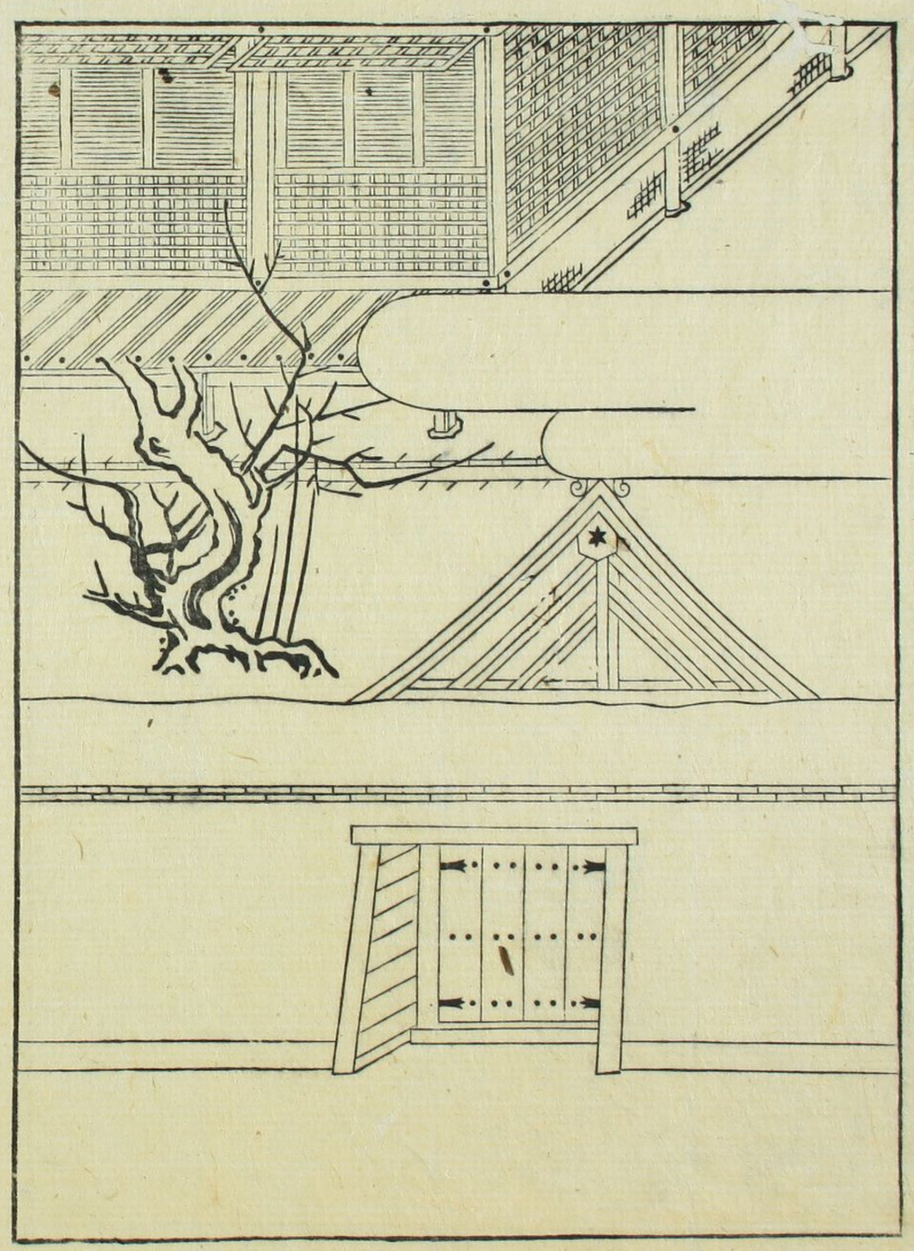
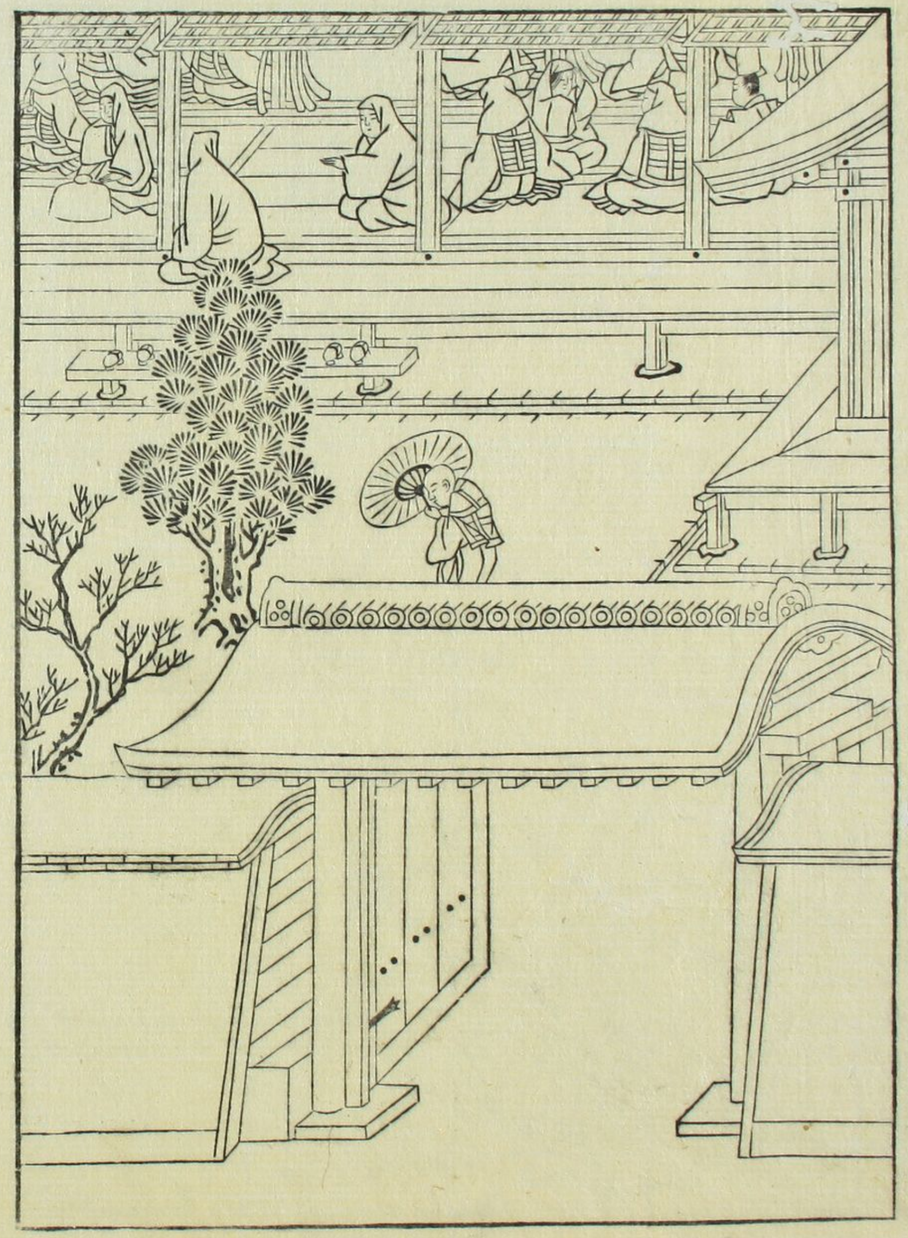
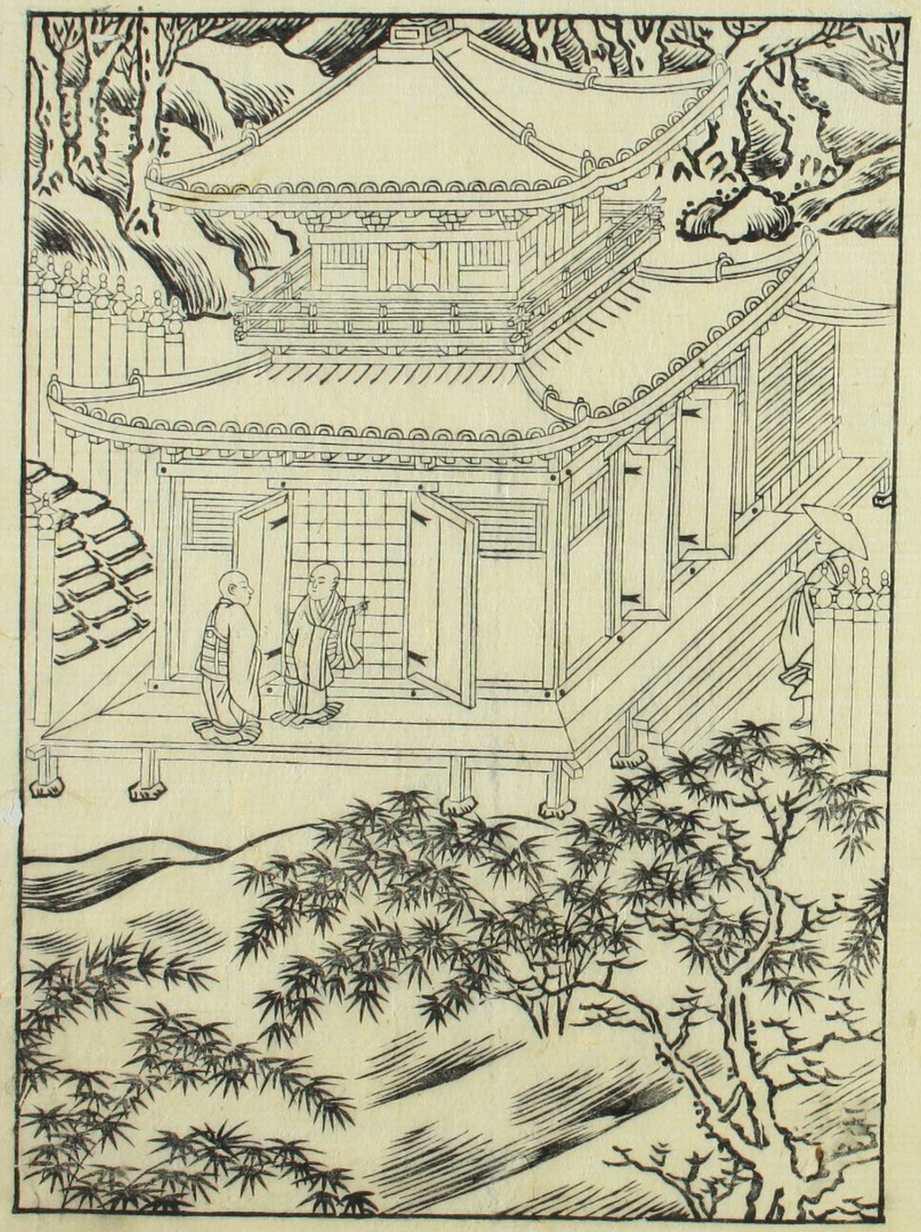
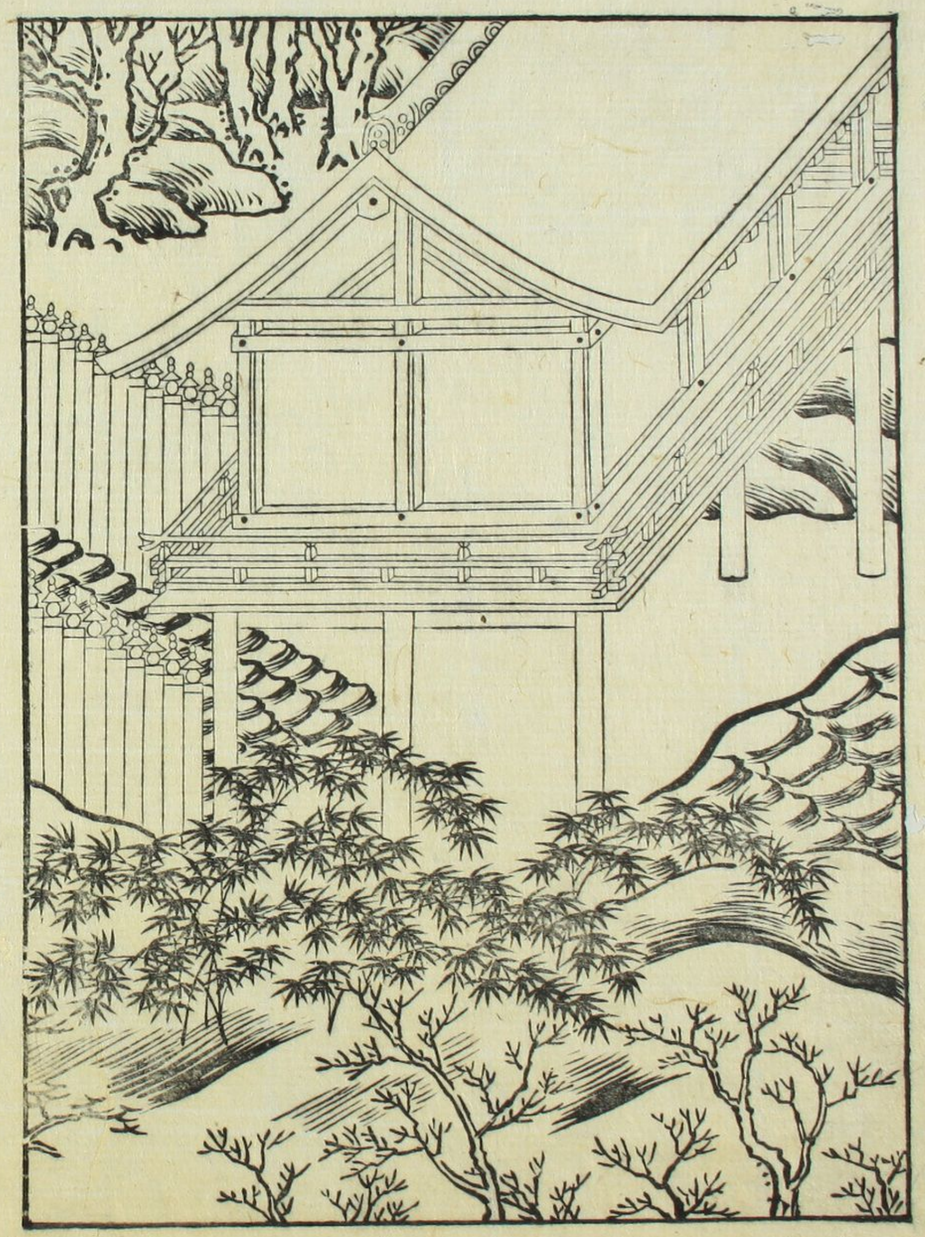
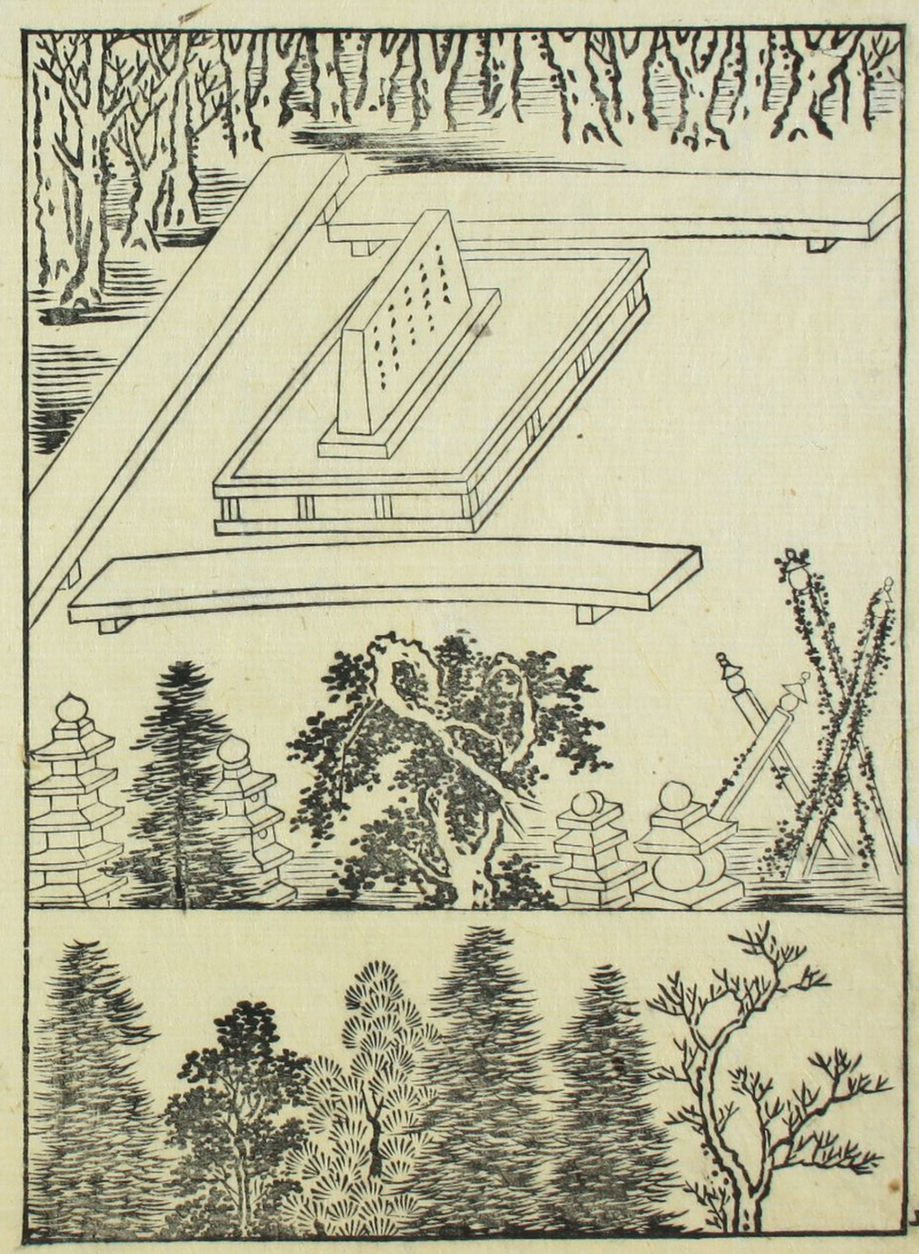
嵯峨よりわたりをきたてまつりて在所を隠密
とべきよりなをれく佛前よりちりひて退散しに
なりぬこて山徒本意成ぬこなる事ないきこは
まてたりを遺骨のゆくえをたゞめるよ
きこえしうば同廿八日夜志のびて廣隆寺
に来迎房圓宣ごをらにたゞをきたてまつ
まてその歳をくまよりゝ





翌年（安貞二年也）正月廿五日の曉更に。西山の栗生
野の幸阿弥陀佛のもとにまゐりたてまつり
て茶毗をなしたる。紫雲ゐたりにこそ。異香
をもちれいぐ。諸人渇仰の涙をひいとく
切れり。茶毗所の西にあたりてをとひらの。
すゑ三まきなる松あり。紫雲彼松にゐりて。
こゝろ地くすほどにれをなり。紫雲の松に
なびきていまにあり。その茶毗所のあとに
堂ぞたてゝ。御墓堂と号して念佛を修せ。
いまの光明寺これなり

遺骨をひろひ寶瓶よりたさえをさめてまつり。
幸阿弥陀佛よあづけをきてをのく退散
しぬそれより正信房は沙汰らして彼芳骨成
たさえたてまつりをめて二尊院は西の岸乃
上り鴈塔をたてゝ貞永二年正月廿五日に。
正信房御骨は御むろへよ。栗生野は幸阿弥陀佛の
えらにまつりむろとゝ称し。幸阿弥陀佛を。
御骨を庵室はめりごえんをつくおさえんをき

たてまつりて。鎮西より下向しにたりつるぎ。
ゐげめるにぬりごめ。ひらをゐ。ひるしも。
かくいまめをさきて。鎰をあげ。あけたるれざる
よ。留守れものこうへ申あひ。仰天きいま
をれ。相伴ところれ門弟二十八人。面こよ力を
たてて。をして。戸をひらんとするにかれ
ハ涙むれく歸なんとする時。御在世なりし。
湛宴ご。ものたるよ申いきんよ。なり見

ぞよいらでむれく歸るべきこたくくごき
申はをるにぬりごめれくるやうにおぼえ
たれ。門弟れ中よちく伝る信覚といふ僧に。
いま一度戸をひきて見よと。正信房申はれ
けをハ。信覚たちよりて戸をひくに相違ふく
あきてたり。歎申ををむきを聞食入れを
るよりそとて。歓喜れ涙ぞたぐ。御骨を
むへたてまつりて。塔中におさめたてまつりぬ。